

第1回 プロジェクト MIRAI

「亀田総合病院メディカルツアー」レポート・第2弾

<ドクター講演>

2 日間におわたる今回の亀田総合病院メディカルツアーでは、様々な立場でご活躍しておられるドクターの方々の貴重なお話しをお伺いすることができた。

初日講演①的場優介先生 (初期研修医・総合診療科～当時)



(講演内容)

私はこの4月から研修を受け始め、これまで産婦人科に2か月、その後麻酔科に3か月所属し、現在総合診療科移り今日で4日目となりました。(講演当時)

まず、私が医師を目指した動機についてお話しします。実は中学時代の夢は医師ではなく、理工学部でロボットを作ることでした。しかし高校時代に親しかった友人が精神的な病を患い、その時に本人やご家族の辛さが自分にも強く伝わってきたことがきっかけとなり、医学部を志望することになりました。その時から、私は患者さんやその周囲の人たちの悩みや苦しみをどうすれば和らげてあげることができるのかと真剣に考えるようになりました。

だから、はじめは精神科医になることが目標でした。しかし慶応義塾大学医学部に入学した後の5年生の実習で学んだ経験から、現在では産婦人科を志すように変わりました。

産婦人科は新しい生命の誕生という次世代にかかわる医療です。次の世代の命たちが安全に生れ育ち、成長していく姿を見ることができる、それこそが自分にとって幸せなのだと感じたからです。

人を助けたい。そしてその人に直接触れ合って助けたい...それが私の医学を志した動機です。



*このお話しの直後、的場先生には現在のご自身の医師としての多忙なライフスタイルをご紹介していただいた。毎日の睡眠時間は4時間を切ることが普通だという。しかし充実した毎日が「とても楽しい」と先生は語られた。

*講演の最中、突如先生の胸ポケットのケータイが鳴った。超多忙な業務の間を縫って、ティープロ生のために演壇に立って下さっていたのだ。後で判ったことだが、この時14時を回っていたのにもかかわらず、ご昼食はまだお済みではなかったとのことだった。

僕に才能があるとすれば、それは努力し続けることができたということ。しかしそれは天賦の才ではない。



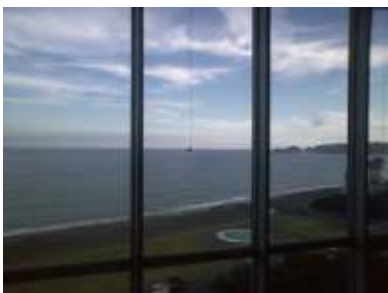
<的場優介先生>

今、確かに毎日はとても忙しいです。しかし自分が何かをしてあげる...調べてあげる...そうしたことで患者さまの病状が確かに改善していくことの喜びは、逆にこの忙しさがあってはじめて味わえるのだと思っています。

次に、高校時代の受験勉強についてご紹介します。私には、勉強とは、やり続けた者が勝つものなのだという信念があります。

私には他の人にあるような「才能」と呼べるものは何也没有ません。しかし、敢て探すならば、自分には努力をし続けるという才能があると思います。しかし、それは生まれつき私に備わっていたものではありません。「今日はこの参考書の、あのページをやるぞ」といった具体的な目標を自分で決めてそれを実行していくことで、この「努力し続ける才能」は育まれていくのです。

努力し続けること、やればできる、という気持ちは成功した人間にのみ実感できるはずです。(談)



*的場先生からは、最後にご自身の慶大医学部時代の学生生活の一端を紹介していただきました。サークル活動やアルバイト、色々なことにチャレンジして友人も増やし、自分の価値観を1か所に凝り固まらせないことが大切です、という貴重なアドバイスが先生から高校生たちに送られました。

初日講演②中村能章先生（後期研修医・腫瘍内科～当時）



<中村能章先生>

*的場先生への生徒たちからの感謝の拍手に続き、もう一人の若手有望ドクターでいらっしゃる中村能章先生が壇上に登られた。

「腫瘍内科の中村と申します…。ところで皆さん、『腫瘍内科』って、聞いたことある人いますか？」

開口一番、名門灘高校ご出身の中村先生は、優しさあふれる関西言葉のイントネーションで生徒たちに語りかけられた。しかし先生の問いかけに答える生徒はいない…。

「えーっと…「腫瘍内科」という言葉を知っている人、いない？…手を挙げてみて…」

中村先生はにこやかに生徒たちに再び問いかけられたが、やはり手は挙がらなかった。

「ゼロ！？…ゼロ…ですかあ…！！」

軽く笑い声を上げながら中村先生は空を仰いだ。20人の生徒たちは申し訳なさそうに下を向いた。

「まあ…確かに、僕も君らと同じ頃には聞いたことがなかった言葉です…」

生徒たちの間に軽い安堵のため息が漏れた。先生は言葉を続けられた。

「腫瘍内科…つまり癌を扱う内科なんやけど…そうそう、皆さんには癌はどのような悪さをするのか？癌って…イメージできますか。」

中村先生は最前列に座っていた中1のH. S. 君を指名した。

「悪い細胞の塊…？」

恥ずかしそうに彼は答えた。

「そうだね！その通り。癌の怖いところは2つあるんだよ。」

中村先生の講演が始まった。

20人の生徒たちはメモを取りながら、中村先生のお話しに引き込まれていった。

(講演内容)

癌の怖いところは 2 点あるんだ。そのひとつは細胞が異常に増殖すること。もう一つはそれが転移する、ということだよ。イメージできたかな？

それでは僕達腫瘍内科医は具体的にどういう仕事をしているかお話ししようね。「腫瘍内科」と言うからにはもちろん「腫瘍外科」がある。こちらは手術で癌を治すんだ。それに対して「腫瘍内科」はお薬を使って癌を治すんだよ。

中村先生は生徒たちを觀まわしてにっこりと微笑んだ。



<中村能章先生>

いま不可能なことが沢山あるということは、僕たちが可能にしなければならぬことが沢山あるということ。

ひと昔前は癌は手術で取れなければお終いだっただ。でもその後いろいろなアプローチが見出されて来たんだ。そのひとつが抗癌剤だよ。つまり僕たち腫瘍内科医は抗癌剤を扱うプロなのです。

*中村先生は、軽くご自分の胸をこぶしで叩かれた。その表情は誇りに満ち溢れていた。

僕たちの具体的な役割は抗癌剤を使うことと、その副作用を取り除いてあげること。それに癌自体が伴う諸々の症状を取り除いてあげること、この 3 つが挙げられます。今回は僕の腫瘍内科医としての仕事のやりがいをもみんなに伝えたいのだけれども...

*先生はここでしばらく言葉を切った。そして少し視線を前に落としたままお話しを再開された。

胃癌には胃癌の医師、肺癌には肺癌の医師がそれぞれの専門医が担当してきた。しかし僕たち腫瘍内科医は身体中の癌全てを診ることが役割なんだ。

しかし...現在はまだ抗癌剤で治らない癌は沢山あるんだ。僕達が今いくら頑張ってもできないことが山ほどある。

でもね...ここでみんなに覚えていてほしいことがあるんだ。

*ここで中村先生は顔を上げられた。そして優しい眼差しで生徒たちを見渡した。



みんなに覚えておいてほしいこと...それはね、できないことが沢山あるということは、それは...しなければならないことが沢山ある、ということなのだよ。だからこそ、そこにやりがいというものがあるんだ。

それから僕の腫瘍内科は歴史が浅く、医師は全然足りていないんだ。日本で始まったばかりなんだ。ぜひ皆さんも医師をめざして僕たちと一緒に頑張りませんか。

*教室に拍手が起きた。中村先生はにっこりと微笑まれた。続いて生徒からの質問に答え、先生はご自分の学生時代のお話しをご紹介して下さった。



僕が医師をめざしたきっかけは、小学生時代に親族の多くが癌で亡くなったことだった。それから自分自身も身体は強くなかったこともある。その頃からずっと、苦しんでいる人に何かできることはないかと思い、苦しい受験勉強を頑張ってきた。

でもね、今思えば勉強して無駄だったと思うことは1コもない。本当にやってきてよかったと思うことばかりだ。

例えば数学では、物事を理屈立てて考えていくという点で役に立つし、他の全ての科目が色んなことに応用がきくので役に立つ。

僕は医大で色んな人に出会えた。勉強以外のことも大事だよ。夢、目標を持てば必ずいい人生が歩めるはずだ。だから...

*ここで中村先生はにっこりと笑って頷いた。

皆さん、将来はぜひ医学部に進学してください。そしてぜひここ亀田病院で一緒に働いてください。さらにできればぜひ腫瘍内科に入ってください。(談)

*明るい笑い声が教室に沸き起こり、生徒たちは中村先生に心からの感謝の拍手を送った。



...レポート第3弾に続く。(次回は病院の各セクションで行われた実習と見学の内容をレポートします。)

プロジェクト MIRAI 参加資格につきまして。

この企画は、ティープロが塾の卒業生たちの進路設計を応援することを目的として行っているものです。一般の方のご参加は募集しておりませんのでご了承ください。

